

神の律法 —その 2—

「なぜなら、人はだれも、律法を行うことによって神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証されて神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。・・」(ローマ 3:20~22)

—— 1 巻にまとめられていたモーセ五書 ——

聖書には旧約聖書と新約聖書とがありますが、その旧約聖書の前半の 5 つの書、(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) に律法が書かれています。

聖書は今でこそ 1 冊にまとめられていますが、昔は巻物になっていました。分割されていました。しかし律法が書かれている所、モーセ五書、(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) は、一巻にまとめられていたのではないかと思います。

—— 律法が旧約聖書の基盤 ——

聖書の全体を読むことは大変です。でも、律法を理解すれば、旧約聖書の 90%を読んだと言っても過言ではありません。旧約聖書の中には律法以外にも文学書と預言書があります。しかし、律法こそが旧約聖書の基盤です。

律法のほとんどはモーセを通して与えられました。ですから「モーセ律法」とか「モーセ五書」とも呼ばれています。

イスラエルの人々は、エジプトを脱出した後、荒野で 40 年もさまよいました。その時、そのきびしい環境の中で「あなたがたはこの様に生きてゆかなければならない」という「主」の教えを受けました。その教えが律法といわれるものです。きっと、苦しい環境の中での教育でしたので、効果があったことでしょう。

—— 六一三の教え ——

聖書の中の律法を集めると全部で 613 の教えになると言われています。この律法を 2 つに分けることができます。肯定的命令と禁止命令です。

① まず「・・・しなさい」という肯定的命令です。**248条**あります。これは、人体の骨の数に相当する、と言われています。

② 次に「・・・してはならない」という禁止命令です。**365条**あります。これは、一年の日数に相当します。1 年は 365 日、両方合わせると **613条**となります。

—— 荒野の中で与えられた律法 ——

さて今まで主日礼拝では、出エジプト記 20 章の十戒を約 2 か月に渡って学んできましたが、実はさらにその後、21 章から 23 章にかけても、律法の教えが続きます。

律法とは逆に読むと法律です。聖書で教えている律法(法律)は、現代の六法全書のようなものかも知れません。つまり、律法は、人間の生活の全ての分野にわたる、神様からの手取り足取りの教えなのです。この律法が、あの荒野の中でイスラエルの民に与えられたこと

を知ると、今、人生の荒野をさまよっている私たちと重なってきて、この人生をどのようにして生きてゆけばよいかを教えられ、急に律法がなにか身近なものに感じられて来ます。

——— 律法を2つに分けると・・・ ———

さて、律法をその内容別に分類すると、大きく2つに分けられます。まず、
・その1、**生活律法と道徳律法**です。内容としては「人を殺してはいけない」「盗んではいけない」「どのように生活すれば隣人を愛して生きていけるか」などの教えです。
・その2、**儀式律法**です。これは、どのようにして神様を礼拝すべきか、ということが教えられています。旧約聖書では、幕屋（礼拝する場所）を作って、そこで羊を犠牲として殺し、その血を祭壇の側面の地面に流しなさい、と書かれています。つまり、どの様にしたら神様に喜ばれる礼拝を献げることができるか、という内容の教えです。

——— 旧約の律法と相通じるイエス様の教え ———

この2つが分かって来ると、後に来られたイエス・キリストの「神の国」の教えが、すでに旧約の律法で語られていることと相通じるものだという事がわかってきます。

確かに、旧約聖書は分厚いのですが、最初の五書「律法書」が、旧約聖書の基盤になっていることを知るだけで、少しホットできますね。この律法に焦点を合わせて旧約聖書を読んできますと、やがてキリスト教信仰の核心部分に到達できると思います。

残念なことに旧約聖書を読まない人が多く、キリストの教えだけを学べば良いと考えている人がいますが、間違いです。律法を知らないで新約聖書のキリストの教えを理解することは出来ません。

——— 現代社会に生かされている律法の教え ———

以前、聖隷クリストファー大学の宗教主任をされていた、鈴木崇巨（たかひろ）先生の母親のことを聞きました。「私の母はもう亡くなりましたが、明治44年の生まれでした。子供の頃、私はありふれた話として、母から貧しさのゆえに自ら命を絶った老人の話や娘を売った親の話聞かされていました。昔、日本には貧しさからくる惨めな事件がたくさんあったそうです。そのような社会を憂えていた母でしたから、老後のわずかばかりの年金をどんなに感謝しながら受け取っていたことでしょうか。

強制的な社会保険制度はヨーロッパのドイツで始まりましたが、その背後には、イエス・キリストの教えられた「隣人愛」や「いと小さき者への愛」の精神がありました。さらに、その背景には旧約聖書の律法の教えがあったのです。

——— 落穂拾いのはなし ———

たとえば、次のような「レビ記」第19章9節の教えもそのうちの一つです。
「あなたがたが自分の土地の収穫を刈り入れるときは、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫した後の落ち穂を拾い集めてはならない。」

ここで語られていることは、具体的には次のようなことです。

刈り入れのある日に、寡婦（かふ）や孤児はその畑の周りで待機していました。管理人の「拾い始めていいよ」の声に、彼らはその畑に入り、落ち穂を拾いました。集めた穂が収入

のない人々の命の糧になりました。人間の善意と慈善の精神を引き出す制度でした。拾う人は「もういいよ」の合図があるまで絶対に畑に入らない正直さが養われます。地主はせつかくの収入が減少するのを我慢する心の柔和さが養われます。つまり、すべての人の思いやりの心の上に、この制度は成り立っているのです。なぜ「主」はこのような制度を考えられたのでしょうか。それは「主」がそのような思いやりの性質をもっておられるからです。

私の母は気づかないまま、社会保険制度が生み出された背後にある律法の教えの恵みに与（あず）かっていたのだと思います。」

確か、先生のお母様は 65 歳から年金を受け取られて、70 歳で召されたと聞きました。

——— 儒教と聖書の違い ———

さて、律法は儒教のように人間が考え出した教えとは違います。たとえば儒教でも聖書でも、同じ様に親を尊敬するようにと教えています。二つは同じ教えのようにみえますが、でも違います。聖書は、天地創造の順序から教えて、親の権威の上に神様の権威があることを前提としています。つまり、人は神様を第一に尊敬しなければなりません。その次に親を尊敬しなければなりません。その様な順序があるのです。このように律法は、常に神様を中心とした一貫性があります。これが律法の特徴です。

——— 十戒は律法の中の一部です ———

また、ある人は律法の教えは「殺すな、盗むな、うそをつくな」というような道徳の教えと思っています。なかには「十戒」だけが律法であると勘違いしている人がいるかもしれません。「十戒」は律法の一部にすぎません。律法は人間生活のあらゆる面に及んでいます。私たち律法の素晴らしさを味わいたいですね。律法を学ぶときに、その教えの背後に「主」のご性質（やさしさ、あたたかさ、あわれみ、配慮、等々・・・）がうかがえるようになってきたと思います。たとえば、親に叱られても、叩かれても、お灸をすえられても、すべての体験の中にあふれるばかりの、親の愛情を感じられた時、今までの叱られた時の悲しさ、痛さ、怖さは、みんな喜びに変わります。律法とはそのようなものかもしれません。

——— 間違った律法の考え方、律法主義 ———

律法は素晴らしい主の教えです。しかし、律法主義に陥（おちい）ってははいけません。律法主義とは律法を守れば救われるとか、他人に律法を守らせようとする、律法至上主義のことです。神様をわきに置いてしまい、律法が神様のようになってしまい、人間生活をがんじがらめにしてしまいます。新約聖書に出て来る律法学者、パリサイ人はこの誤りに陥っていました。

——— 律法は愛によって全うされる ———

イエス様は、次の様に言われました。「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するためにきたのです。」（マタイ 5:17）律法は肉の力では行う事はできません。しかし、主の愛がわかって、その愛で神様を愛し、人を愛する時に、実はもう律法を全うしていることに気づくのです。

イエス様の弟子たちは、イエス様の教えによって、少しずつ律法主義の呪縛から解放されて行きました。しかし、あれほど聖書を学んでいたはずのユダヤ人指導者たちはイエス様の教えを理解できないで、敵意をますますあらわにして行きました。そして、そのねたみの罪は、やがてイエス様を十字架に付けてしまうのでした。

——— 律法の中で最も大切な教え ———

さて、イエス様は六一三もあると言われる**律法の中で最も大切な教え**は

第一が「神である主を愛すること」(申命記 6:5)であり

第二は「隣人を自分のように愛すること」(レビ 19:18)であると集約されました。

イエス様は律法を大切にしました。しかし、律法主義には徹底的に反対されました。

十戒でも、第一戒～第四戒 は神様と人との関係

第五戒～第十戒 は人と人との関係であると学びました。

——— 愛の十戒 ———

昔、イギリスの近くを航行していた船が、暴風雨にあって難破した時、船員の一人は、ようやくのことで海岸に泳ぎつき、一人の農夫に助けられました。

しかし、こんな方法でしばしば敵国のスパイが入ってくるものですから、農夫は警戒して、「君は何者だ」と質問しました。すると、その助けられた男は、「私はクリスチャンだ」と答えたのです。そこで、「ほほう、君はクリスチャンならば神の戒めを知っているか、一体いくつあるかね」と聞きますと、その男は「それは十二ある」というのです。「それはおかしい、昔からモーセは我々に十の戒めを与えているが、戒めが十二あるというのは初めて聞いた。じゃあ、それを言ってくれたまえ。」 助けられた男は、とうとうと、モーセの十戒を述べた後、「しかし、私たちの主イエス様は、その十の戒めに更に加えて、私は、あなたがたに新しい戒めを与える、と申されました。」と言いました。

・その1、「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

・その2、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」

その話を聞いた農夫は、彼が本当のクリスチャンであることを知って、大変喜び、その男の元気が回復するまで親切に面倒をみたということです。

——— プラス、愛 ———

さて、今まで学んで来たことを繰り返しますが、神様はモーセを通して、人々に十の戒めを与えられました。しかし、人々はこの厳しい十戒の前に常に有罪でした。律法は罪を自覚させるだけです。律法を行うことによって人は救われません。モーセの十戒はそのままでは不完全でした。

さてイエス様は新しい戒めとしてモーセの十戒に「愛」を付け加えました。神様を愛することと、人を愛することです。

イエス様は「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。・・・わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13:34) と言われました。イエス様が愛を加えられたことによって、十戒ははじめて完全なものとなったのでした。